

1975年の世界卓球選手権、近所に住む高橋省子さんが女子ダブルス優勝という快挙を達成し、町中が湧きました。高橋さんの美しいプレーに憧れ、中学校では迷わず卓球部に入りました。顧問の先生の熱心なご指導もあり、仲間にも恵まれ、卓球に夢中になりました。

目標だった関東中学出場に1歩届かず、悔しさいっぱい引退した私は、もっと強くなりたくて、近所の県立真岡女子高校に進学しました。入学してみたら、次元の違う先輩方や同級生、技術や練習内容の差に唖然としました。果たして自分のレベルでやっていけるのだろうか、不安でいっぱいでした。厳しい3年間でした。幼少期に「巨人の星」や「アタックナンバーワン」を見て育っていなければ、きっと途中で折れていただろうと、今になって思います。改めて考えてみると、この3年間は卓球技術よりも「礼儀、時間、整理整頓」を徹底的に教わりました。全寮制の強豪私学ひしめく中、田舎の下校時刻が決まっている県立学校が勝負するには、相当な工夫が必要です。よく「1日の練習で3日分強くなれ」とか、「1時間の練習で3時間分上手くなれ」などと指導されました。私学と比べて半分以下の練習時間だった私たちが勝つためには、練習の質を高めることが最良の方法だったのです。そして「礼儀、整理整頓」。練習に対して心を整えるだけでなく、誰からも応援してもらえ、好感をもってもらえる人間になること、それは卓球よりも大切なことだと教わりました。幸いにもインターハイでは「団体3位入賞、ダブルス優勝」という成果を上げることができ、「誰でも死に物狂いで努力をすれば、道は開けるかもしれない」と、大きな自信になった高校時代でした。この時仕込まれたこの3つの言葉は、その後の人生の基盤となっています。

何とか合格できた筑波大学、小学生の頃からの「教師になる」という夢が一気に具体化してきたとともに、自分が大きく変わった貴重な4年間になりました。入学当時は、卓球に対する「燃え尽き症候群」的になり、練習に身が入りませんでした。そんなある日、4年生の先輩たちが、何気ない会話の中で「教員になったらこう教える、指導のためにこのラバーを使いこなせるようになっておく」のようなことを話されていました。今の感情でしか動いていない自分を思い知らされ、自分を見直し、将来像を思い描くきっかけをいただきました。「自分を変えなくては」と自分探しが始まった1年生の夏、全国国公立大会では、運良く団体戦と女子シングルスで優勝することができました。その後、けががあったりラバーの色などのルールの改正によるプレイスタイルの改良に悩んだりと紆余曲折はありましたが、大学4年間で団体戦4連覇でき、大きなプレッシャーから解放された安堵感がありました。また、国公立という連帯感のようなものも深まり、他大学の友達もできました。プレイヤーとしてだけでなく、指導者の卵としての視点からも刺激をいただけた国公立大会でした。そして、大学生活の4年間は「夢」を「現実」に近づけてくれました。筑波大学は心の故郷、今でも思い出すとワクワクします。

大学卒業後は、公立中学校の保健体育教諭、そして卓球部顧問として30数年間、忙しくも充実した教員生活を送ってきました。ずっと卓球に関わる仕事ができていることに感謝の気持ちでいっぱいです。東京オリンピックの金メダル獲得をはじめとした選手の活躍、卓球界の盛り上がりも嬉しい限りです。卓球に関わっている全ての方々にエールを送ると共に、私自身もずっと卓球に携わっていければと思っています。